

『遙かな町へ』再読

川崎 宏子

先日、漫画家の谷口ジローさんの訃報が新聞に載りました。以前読んだ谷口ジロー作の漫画『遙かな町へ』をもう一度読んでみました。

48歳の主人公が、故郷の墓地で気を失い、目覚めると14歳の中学生の自分に戻っていた。家族も友達も町の様子も1960年代のあの頃のままだった。それは、父親が失踪する数か月前だった。父がなぜ失踪したのか、今なら止められるのではないかと思いつつながら、中学生を生きなおすうちに、14歳には知ることのできなかつた家族の過去、父の葛藤を知るようになる。失踪当日、父を追いかけて駅に行き、行かないでほしいと頼む。「他にもっと違う生き方があるんじゃないか思うてな」「戦争に決められてしまう」という父の言葉に48歳の中学生は、一瞬の共感と諦観で止められず行かせてしまう。「置かれた場所で咲くことを選ぶ人、別の人生に踏み出す人。人生のどこかでそれを迷うとき、抛り所となるのは何だろう。主人公は48歳の自分に戻った時、新鮮な目を持って家族のもとに帰って行く。

『遙かな町へ』は、ヨーロッパでも翻訳され、フランスで「アングレーム国際マンガフェスティバルベストシナリオ賞」を受賞。これを原作とした映画『Quartier Lointain』(実写版)が作られた。

1960年代のフランスの風景は、見たこともないのにどこか懐かしさを感じさせる。映画は、文字として書き込んでいない心の内を、演技で淡々と静かに表現している。観る者の解釈に委ねられた部分を読み取るのが楽しい。

(2017.3.6)